児童期の被養護体験が大学生の共感性に及ぼす影響

Influence of Being Nurtured Experiences on University Students' Current Levels of Empathy

山　本　　栞*　　藤　崎　亜由子**
YAMAMOTO Shiori　　FUJISAKI Ayuko

本研究は大学生を対象として、児童期の被養護体験が青年期の共感性（被影響性、共感的配慮、想像性、視点取得、個人的苦痛）に与える影響を検討した。過去の父親、母親、教師、友達との関係を振り返り、被養護体験を現在どのように認知しているかを指標として分析を行った。その結果、「被影響性」や「個人的苦痛」に関しては過去の被養護体験の影響は少なく、一方で「共感的配慮」と「視点取得」については、過去の被養護体験が影響することが示された。また、そこには男女差がみられ、男性は比較的過去の被養護体験の影響が少ない一方で、女性にはみられなかった「想像性」への被養護体験の影響がみられた。ただし、いずれの項目も決定係数の値が低かった。このことは、児童期の被養護体験は青年期の多次元共感性に少なからず影響しているが、本研究で採用した予測変数だけでは共感性を説明するには不十分であり、今後のさらなる検討が必要である。

キーワード：共感性，多次元共感尺度，被養護性，児童期
Key words：empathy, multidimensional empathy scale（MES）, being nurtured experiences, elementary school children

問題・目的

私たちは日常生活において他者と関わる際に、他者と同じ気持ちになったり、他者の気持ちを理解したりする。このような一般的に「共感」といわれる現象は、他者との関わり合いを円滑にし、コミュニケーションにおいて基本的な核をなす。岩下･春木（1975）によると、共感性（empathy）は､個人の他者理解を深めるとともに、個人間の結びつきを強めたり、対人関係や社会生活を円滑にしたりする上で重要な役割を果たすとされている。

菊池（1988）によると、共感性は向社会的行動の動機付けの要因としても注目されている。向社会的行動とは、他者の気持ちのつながりを強めたり、それをより望ましいものにしようとしたりする場合にとられる行動のことである（菊池 , 1988）。鈴木（1992）は、女子大学生へ質問紙調査を行い、共感性と向社会的行動には有意な正の相関があることを明らかにしている。また、登張（2003）は、多次元的共感性尺度と向社会的行動との関係を検討し、「共感的関心」「ファンタジー」「気持ちの想像」とは正の相関が、「個人的苦痛」とは相関がないことを示している。以上のように、共感性は向社会的行動に影響を及ぼす要因のひとつであることが明らかになっており、大学生の共感性を検討することは有益な視点であると考えられる。

多次元共感性とは：共感性の研究が進められる中で、共感性を単一の構成概念としてではなく、認知的要素と感情的要素の両方を含む複数の構成要素からなる多次元的概念として捉える新しい視点が生まれた。澤田（1995）によると、心理学の領域において、共感性とは「相手の感情を理解すること」とする認知面を重視した定義と「相手の感情を自分も同じように感じること」とする感情面を重視した定義というように、２つの側面にスポットを当てた定義がある。このように、共感性には認知的要素と感情的要素があり、共感性を多次元的視点で捉えることで発達的変化や個人差をより詳細に検討できると考えられている。

多次元的共感性の研究の動向を受け、登張（2003）は青年期の共感性を検討するために、新たな青年期用の多次元的共感性尺度を作成した。この尺度を作成するにあたり、登張（2000, 2003）は、既存の複数の共感性尺度や共感性理論の下位次元を、感情の認知、視点取得、ファンタジー、共感的関心、個人的苦痛、感情的冷淡さの６つのカテゴリーに分類できると想定し、既存の尺度からの項目の選定と新たな項目の作成を行った。その結果、４つの次元からなる多次元的共感性尺度を提案している。この尺度は共感性の下位次元として、「共感的関心（他者の状況や感情体験を理解して自分も同じように感じ、他者に向かう暖かい気持ちを持つこと）」、「個人的苦痛（助けを必要としている他者に対して、苦痛や不安など自己指向の気持ちを持ち、他者の状況に応じた行動をとることができないこと）」、「気持ちの想像（他者の立場に立って、相手の気持ちを想像すること）」、「ファンタジー（小説やドラマ、映画などに登場する架空の人物に感情移入したり、自分だったらどのような気持ちになるか想像したりすること）」の４次元を取り上げている。それぞれ「共感的関心」は「共感的配慮」と､「ファンタジー」は「空想」「想像性」「想像力」とよばれるこ

＊姫路市立大津小学校
令和４年７月14日受理
＊＊兵庫教育大学大学院学校教育研究科人間発達教育専攻学校心理・学校健康教育・発達支援コース 准教授

ともある。また、「気持ちの想像」は一般的には「視点取得」とよばれている。この中では、「共感的関心」、「個人的苦痛」は感情的要素に分類され、「気持ちの想像」、「ファンタジー」は認知的要素に分類される。

さらに、鈴木・木野・出口ら（2000) は、日本における共感性測定のための尺度の多くが、海外において作成された尺度を翻訳したものであることを問題視し、これまでの知見を踏まえた日本独自の尺度を開発することを試みた。そして、鈴木・木野（2008）は、他者の心理状態に対する認知と情動の反応傾向をそれぞれ他者指向性―自己指向性に焦点を当て弁別し、新たな多次元共感性尺度（the Multidimensional Empathy Scale : MES）を作成した。この尺度は共感性の下位次元として、これまでの「共感的関心」「個人的苦痛」「視点取得」「ファンタジー」に加え、「被影響性」が含まれている。「被影響性」は対人不安の高さや自己主張のなさを背景とした他者の心理状態に対する影響の受けやすさを示すものであり、感情的要素に分類される。このように共感性を多次元的視点から捉えることは、共感性に着目するうえで非常に重要な視点であると考えられる。

共感性の規定要因：共感性の個人差を規定する要因の検討を行った先行研究では、共感性と愛着スタイルや親の養育態度との関連を検討した研究が多くみられる。大学生の時点における養育者に対する愛着スタイルが共感性に与える影響について検討した宮腰（2005）によると、回避型よりも安定型で共有経験が高く、安定型よりも回避型で非共有経験が高いことが示された。なお、共有体験とは角田（1994）が作成した尺度であり、共感性の高さを示す指標となる。つまり、養育者との安定した愛着スタイルを持つ人は、そうでない人に比べて共感性（共有経験）が高いことが示された。

また、大学生を対象に認知的共感性と成人愛着の関連について検討した今野・小川（2012）によると、成人愛着において、愛着回避傾向のある人は他者に対する関心や意識が低いために認知的共感性が乏しくなることが示された。辻道・植田・桂田（2017）の研究では、大学生を対象に現時点での両親の養育スタイルと共感性の関係を調べた。その結果、母親の受容性が高い場合、男性においては共感性が高くなることが示された。一方で、女性においては、母親の受容性が高く父親の統制性が低い人は共感性が高くなることが示された。以上のことから、大学生においても現在の養育者との関係が共感性に関連していることは明らかである。

本多・櫻井（2010）の研究では、大学生を対象に、過去及び現在の親との関係の認識と共感性の関連について調べた。その結果、子どもの頃の「母親への愛着」と思春期の頃の「母親への敬愛」が高い場合、「共感的関心」が高くなることが示された。大浦・福井（2016）の研究では、大学生を対象に愛着の顕在・潜在的内的作業モデルが共感性に及ぼす影響について調べた。その結果、顕在不安と潜在不安は「視点取得」に、顕在不安と顕在回避が「共感的理解」に対して負の影響を及ぼすことが示され、安定した愛着の顕在・潜在的内的作業モデルを持っている人はそうでない人よりも、「視点取得」や「共感的理解」が高いことが示唆された。以上のことから、現在だけでなく過去の養育者との良い関係性や、安定した内的作業モデルを持っていることが、共感性に影響を及ぼしていることが示されている。

私たちは養育者との愛着関係を基盤として他者との関係を築いていくため、養育者との関係は特に重要であるが、養育者以外の重要な他者との関係はどのように影響するのだろうか。楜澤・福本・岩立（2009）は、青年期における様々な対人関係性の認知を探るために、被養護・養護体験尺度を作成した。この尺度は、兄姉、弟妹、父、母、先生、ペットの６対象に対する被養護・養護体験を測る尺度であり、過去の体験を回顧し子ども自身が他者をどのように捉えているかを振り返って回答するものである。そのため、「愛着スタイル」や「親の養育態度」の研究では明らかにされていない、養育者以外の重要な他者との関係性をどのように認知しているかを明らかにすることができる。

被養護・養護体験尺度について：先述したように、被養護・養護体験尺度（楜澤・福本・岩立 , 2009）を使用することで、養育者のみならず、より幅広い重要な他者との関係性の認知を明らかにすることができる。楜澤・福本・岩立（2009）が作成した被養護・養護体験尺度が使用されている先行研究の多くは、過去の被養護体験が現在の大学生の「養護性の個人差」にどのように影響を及ぼしているのかを検討している。養護性とは、小嶋（1989）が「相手の健全な発達を促進するために用いられる共感性と技能」と定義し、提唱したものである。小嶋（1989）は、養護性の対象について、代表的には子どもが対象となるものの、障害を持つ老人、一時的に有能性を失っている状態にある人、怪我や疾病を負っている人、植動物なども含むとしており、生涯発達途上にある弱いものは幅広くその対象になると考えられている。また、楜澤（2011）によると、養護性は弱い対象を育てるという視点を含む概念であり、相手を育てようとする点や、立場の弱い相手を保護する点があるとされている。以上のことから、養護性は限られた対象に向けたものであり、相手を世話し育てるという視点が強い特性であるといえる。これに対し、共感性は前述したように、他者一般に向けたもので円滑な人間関係の基盤となり、社会生活を気持ちよく送るために役に立つ重要な特性であるといえる。本研究では、他者一般に向けられる共感性を、円滑な人間関係を構築していく社会性の一部として捉え検討するため、養護性ではなく共感性に注目し、過去の被養護体験が現在の大学生の共感性（多次元共感性）にどのように影響しているのかを検討したい。

本研究では回顧の対象時期を児童期とした。児童期は、幼児期よりも記憶や印象がより定かに残っており、養育者以外との交流が増える時期でもあるため、様々な対人関係の影響を比較するのに適している時期であると考えられる。しかし、過去の体験を振り返ることは認

知のゆがみが生じ、実際のものとは変容している可能性があるといえる。この点に関していえば、楜澤（2011）は、今現在捉えている関係性自体に意味があり、過去の体験そのもの以上に、現在どう受け止めているかということの方がはるかに重要であると述べている。したがって、本研究でも大学生を対象に、児童期の被養護体験を振り返り、様々な対人関係を今現在どのように認知しているかを探り、過去の被養護体験が現在の共感性にどのように影響しているのかを調べたい。

本研究の目的：本研究では、児童期の被養護体験を振り返り、過去の両親との関係、教師との関係、友達との関係をどのように認知しているかが、大学生の現在の共感性（以下、特に断りのない場合、共感性は多次元共感性を指すものとして使用する）にどのような影響を与えているかを検討することを目的とする。特に、多次元共感性のどの次元に過去の被養護体験が影響しているのかを検討したい。また、過去の被養護体験も養育者のみとの関係ではなく、友達や教師との関係性についても検討を行う。楜澤・福本・岩立（2009）の研究ではペットへの養護性についても言及されていることから、本研究でも検討した。さらに、先行研究より男女によってその影響過程が異なることが示されていることからも、本研究では性差についても検討したい。

方　法

調査対象者と実施方法　近畿地方及び中国地方の学生、計922名にオンライン（Google Forms）で調査依頼をした。調査依頼者のうち、215名（男性68名、女性145名、答えたくない2名）から回答を得られた（回収率23.3%）。回答を得られた対象者のうち、欠損値データを省いた193名（男性59名, 女性134名）の回答を分析対象とした（有効回答率20.9%）。年齢の範囲は18歳から25歳までで、平均年齢は19.9歳（男性20.1歳, SD = 1.48; 女性19.9歳, SD = 1.20）であった。結果、4年制大学192名、短期大学1名で、学部は教育学部系が165名、その他の学部が28名（社会福祉・看護学部系11名、理系学部6名、経済・法学部系8名、文系学部3名）であった。また、小学生の頃に家庭におけるペットの飼育経験のある人数は83名（男性21名、女性62名）であった。

実施にあたっては、Google Formsのアンケート機能を利用した。なお、回答を送信しても回答者の個人情報は閲覧できないように設定し、調査協力者のプライバシーの保護に努めた。

調査時期　2021年5月中旬から11月中旬にかけて実施した。

調査内容　質問票は、「1. フェイスシート」「2. 多次元共感性尺度(MES)」「3. 被養護体験尺度」の3領域からなる質問票を作成した。本研究では、大学生の多次元共感性を検討するにあたって、海外の既存尺度を日本語訳したものではなく、下位尺度が既存の尺度より詳細に分類されているという点から、鈴木・木野（2008）が作成した多次元共感性尺度を使用した。

⑴フェイスシート　性別、年齢、現在通っている学校の種類、現在所属している学部、小学生の頃の家庭におけるペット飼育経験について質問した。現在通っている学校の種類は、大学か短期大学の選択にした。また、現在所属している学部は、教育学部かその他の選択にし、その他を選択した際には学部名を入力できるように設定した。家庭におけるペットの飼育経験については、ペット飼育経験の有無を尋ねた後、1番かわいがっていたペットの種類（犬、猫、小型哺乳類、鳥、その他）を尋ねた。そして、1番かわいがっていたペットとの関係について、「私はペットをかわいいと思っていた」「私はペットを好きだった」「私はよくペットの世話をした」から選択してもらい（複数選択可）、この合計得点（3点）をペットへの養護体験尺度として使用した。

⑵多次元共感性尺度(MES)　共感性を測定するための尺度として、鈴木・木野（2008）によって作成された多次元共感性尺度（the Multidimensional Empathy Scale : MES）を使用した。「被影響性」5項目、「共感的配慮（他者指向的反応）」5項目、「想像性」5項目、「視点取得」5項目、「個人的苦痛（自己指向的反応）」4項目の5因子、24項目からなる。回答は「1. 全くあてはまらない」から「5. とてもよくあてはまる」までの5件法で求めた。

尺度の項目例は以下の通りである。被影響性：「まわりの人がそうだといえば、自分もそうだと思えてくる」「自分の感情はまわりの人の影響を受けやすい」など、共感的配慮：「悲しんでいる人を見ると、なぐさめてあげたくなる」「人が頑張っているのを見たり聞いたりすると、自分には関係なくても応援したくなる」など、想像性：「面白い物語や小説を読んだ際には、話の中の出来事がもしも自分に起きたらと想像する」「空想することが好きだ」など、視点取得：「人と対立しても、相手の立場に立つ努力をする」「常に人の立場に立って、相手を理解するようにしている」など、個人的苦痛：「他人の失敗する姿をみると、自分はそうなりたくないと思う」「他人の成功を素直に喜べないことがある」など。

⑶被養護体験尺度　児童期の被養護体験を測定するための尺度として、楜澤・福本・岩立（2009）が作成した被養護・養護体験尺度を一部変更して使用した。楜澤（2011）は、被養護・養護体験尺度を「青年期における様々な対人関係の認知を探ることのできる尺度」としているため、この尺度を使用して、児童期の様々な対人関係を今現在どのように認知しているかを探ることは妥当であると考えられる。本研究では、被養護体験が多次元共感性に与える影響を調査するため、養護体験尺度は使用せず、被養護体験尺度のみを使用した。また、より幅広い重要な他者との関係性の認知を明らかにするため、「兄姉からの被養護体験」を「友達からの被養護体験」に変更して使用した。その際、各項目の「兄（姉）は」という文言を「友達は」に変更し、「兄（姉）は飽きないように遊んでくれた」という項目は、友達にはあてはまらないと考えられるため項目から除外した。この

尺度は、「父親からの被養護体験」9 項目、「母親からの被養護体験」9 項目、「教師からの被養護体験」6 項目、「友達からの被養護体験」8 項目の 4 因子、32 項目からなる。回答は「1. 全くあてはまらない」から「6. とてもよくあてはまる」までの 6 件法で求めた。

⑷**倫理的配慮**　本調査は無記名で実施した。質問票には、研究の目的を示した上で、個人が特定されることは一切ないこと、回答は自由意志に基づくものであり回答しないことにより不利益は一切生じないことを明記した。また、データは本研究の目的以外には使用せず、論文発表後に 10 年経過したら速やかに破棄することや、結果の公表の方法について記載し、同意を得た後に調査を実施した。

⑸**統計パッケージ**　IBM SPSS Statistics 26 を使用して分析を行った。

結　果

1．各尺度の信頼性

多次元共感性尺度（MES）の内的整合性を検討するため、それぞれの下位尺度について α 係数を算出したところ、「被影響性」で α = .693、「共感的配慮」で α = .786、「想像性」で α = .696、「視点取得」で α = .738、「個人的苦痛」で α = .664 であり、若干低い下位尺度もあるが、おおむね内的一貫性が確認されたとして分析を行った。次に、被養護体験尺度の内的整合性を検討するため、それぞれの下位尺度について α 係数を算出したところ、「父親からの被養護体験」で α = .935、「母親からの被養護体験」で α = .930、「教師からの被養護体験」で α = .919、「友達からの被養護体験」で α = .927 であり、いずれも十分な内的一貫性が確認されたとして分析を行った。

2．被養護体験と多次元共感性の平均値の比較

多次元共感性尺度と被養護体験尺度の各下位尺度の男女差を検討した結果を示す（Table 1）。その結果、多次元共感性尺度の「被影響性」「共感的配慮」「視点取得」で有意な性差がみられた（被影響性：t (191) =−2.62, p<.05; 共感的配慮：t (191)=−3.30, p<.01;　視点取得：t (191)=−2.33, p<.05）。すべて女性の平均値が男性に比べて高かった。父親、母親、教師、友達からの被養護体験については、男女差はみられなかった。児童期の被養護体験には男女で違いはないが、青年期の共感性は女性の方が高いといえる。

3．児童期の被養護体験と現在の多次元共感性の関連

児童期の被養護体験と現在の共感性がどのように関連しているかを調べるために、まず男女別にそれぞれの体験ごとに平均値をカットポイントとして体験得点が低い群（L 群）と高い群（H 群）に分け、各体験の高低ごとに多次元共感性下位尺度の平均値の差の比較（t 検定）を行ったの結果を示す（Table 2）。

男性では「父親からの被養護体験」の高い群が、低い群に比べて「被影響性」の平均値が有意に高かった（t(57)=−.61, p<.05）。また、「母親からの被養護体験」の高い群は「想像性」が有意に高くなっていた（t(57)=−2.86, p<.01）。「教師からの被養護体験」「友達からの被養護体験」については、いずれにも被養護体験の高低で多次元共感性の下位尺度に平均値の差はみられなかった。

女性においては「父親からの被養護体験」の高い群は低い群に比べて「共感的配慮」、「個人的苦痛」の平均値が有意に高かった（共感的配慮：t(132)=−2.30, p<.05; 個人的苦痛：t(132)=−2.04, p<.05）。また「母親からの被養護体験」の高い群は「共感的配慮」と「視点取得」が有意に高く（共感的配慮：t(132)=−3.56, p<.01; 視点取得：t(132)=−3.56, p<.01）、「教師からの被養護体験」が高い群も「共感的配慮」と「視点取得」が有意に高かった（共感的配慮：t(132)=−2.70, p<.01; 視点取得：t(132)=−2.31, p<.05）。さらに「友達からの被養護体験」の高い群も「共感的配慮」と「視点取得」が有意に高かった（共感的配慮：t(132)=−3.16, p<.01; 視点取得：t(132)=−2.44, p<.05）。

次に、男女別に各尺度間の相関を Table 3 に示す。まず、男性においては父親、母親、教師、友達からの被養護体験尺度間の相関をみると、父親以外はすべてで弱いから中程度の正の相関がみられた（r=.368 ～ .559, すべて p<.01）。父親からの被養護体験は母親との正の相関はみ

Table 1.　各尺度得点の男女別の平均値と標準偏差

得点名	男性(n=59)		女性(n=134)		t 値		性差
	M	SD	M	SD			
被影響性	3.13	(0.67)	3.41	(0.70)	-2.62	*	男性＜女性
共感的配慮	3.87	(0.59)	4.19	(0.63)	-3.30	**	男性＜女性
想像性	3.66	(0.77)	3.81	(0.68)	-1.41		
視点取得	3.73	(0.56)	3.94	(0.59)	-2.33	*	男性＜女性
個人的苦痛	3.50	(0.69)	3.67	(0.69)	-1.53		
父親からの被養護体験	4.30	(1.00)	4.27	(1.12)	0.17		
母親からの被養護体験	5.12	(0.66)	5.26	(0.84)	-1.15		
教師からの被養護体験	4.27	(1.03)	4.48	(0.93)	-1.41		
友達からの被養護体験	4.87	(0.73)	4.97	(0.78)	-0.80		

*p <.05, **p <.01

Table 2.　各被養護体験の高低による多次元共感性下位尺度の比較（男女別）

		父親からの被養護体験					母親からの被養護体験				
		L		H		*t* 値	L		H		*t* 値
男性(*n*=59)	被影響性	2.96	(0.69)	3.32	(0.60)	-2.61 *	3.20	(0.72)	3.10	(0.63)	0.43
	共感的配慮	3.79	(0.59)	3.96	(0.57)	-1.16	3.76	(0.60)	3.96	(0.57)	-1.31
	想像性	3.61	(0.85)	3.70	(0.68)	-0.47	3.36	(0.73)	3.90	(0.72)	-2.86 **
	視点取得	3.85	(0.51)	3.59	(0.59)	1.81	3.76	(0.50)	3.70	(0.60)	0.43
	個人的苦痛	3.58	(0.63)	3.42	(0.75)	0.90	3.50	(0.67)	3.50	(0.72)	-0.04
女性(*n*=134)	被影響性	3.34	(0.79)	3.47	(0.62)	-1.05	3.31	(0.69)	3.48	(0.70)	-1.40
	共感的配慮	4.05	(0.68)	4.30	(0.57)	-2.30 *	3.97	(0.67)	4.34	(0.56)	-3.56 **
	想像性	3.73	(0.72)	3.88	(0.64)	-1.28	3.70	(0.68)	3.90	(0.67)	-1.70
	視点取得	3.84	(0.67)	4.02	(0.52)	-1.80	3.73	(0.61)	4.09	(0.54)	-3.56 **
	個人的苦痛	3.53	(0.73)	3.78	(0.64)	-2.04 *	3.60	(0.69)	3.72	(0.70)	-0.91
		教師からの被養護体験					友達からの被養護体験				
		L		H		*t* 値	L		H		*t* 値
男性(*n*=59)	被影響性	3.03	(0.69)	3.21	(0.65)	-1.05	3.11	(0.68)	3.14	(0.67)	-0.19
	共感的配慮	3.74	(0.58)	3.98	(0.58)	-1.59	3.73	(0.42)	4.00	(0.68)	-1.69
	想像性	3.57	(0.83)	3.73	(0.73)	-0.80	3.47	(0.89)	3.82	(0.63)	-1.78
	視点取得	3.75	(0.58)	3.71	(0.55)	0.24	3.65	(0.57)	3.79	(0.55)	-0.98
	個人的苦痛	3.48	(0.76)	3.52	(0.63)	-0.23	3.42	(0.66)	3.58	(0.71)	-0.90
女性(*n*=134)	被影響性	3.29	(0.70)	3.51	(0.69)	-1.81	3.24	(0.71)	3.45	(0.70)	-1.44
	共感的配慮	4.03	(0.72)	4.32	(0.51)	-2.70 **	3.86	(0.77)	4.27	(0.56)	-3.16 **
	想像性	3.77	(0.67)	3.85	(0.69)	-0.62	3.81	(0.49)	3.82	(0.72)	-0.05
	視点取得	3.81	(0.64)	4.05	(0.53)	-2.31 *	3.70	(0.67)	4.00	(0.56)	-2.44 *
	個人的苦痛	3.59	(0.75)	3.74	(0.64)	-1.28	3.57	(0.71)	3.69	(0.69)	-0.80

*p<.05, **p<.01

Table 3.　男女別に見た各尺度得点の相関係数

		多次元共感性尺度					被養護体験尺度			
		被影響性	共感的配慮	想像性	視点取得	個人的苦痛	父親	母親	教師	友達
男性(*n*=59)	被影響性	—								
	共感的配慮	.196	—							
	想像性	-.077	.232	—						
	視点取得	-.165	.325 *	.060	—					
	個人的苦痛	.161	-.035	.004	-.037	—				
	父親からの被養護体験	.159	.032	.050	-.079	-.105	—			
	母親からの被養護体験	.050	.160	.438 **	-.012	-.001	.424 **	—		
	教師からの被養護体験	.013	.205	.172	-.028	.086	.150	.368 **	—	
	友達からの被養護体験	-.005	.187	.449 **	-.032	.032	.103	.559 **	.483 **	—
女性(*n*=134)	被影響性	—								
	共感的配慮	.214	—							
	想像性	.123	.102	—						
	視点取得	.123	.453 **	.113	—					
	個人的苦痛	.146	-.188 *	.279 **	-.057	—				
	父親からの被養護体験	.015	.232 **	.061	.159	.099	—			
	母親からの被養護体験	.153	.335 **	.086	.409 **	.086	.321 **	—		
	教師からの被養護体験	.161	.416 **	.017	.324 **	.101	.261 **	.389 **	—	
	友達からの被養護体験	.174 *	.415 **	.030	.348 **	.075	.269 **	.317 **	.618 **	—

*p<.05, **p<.01

Table 4.　被影響性を従属変数としたときの重回帰分析の結果（男女別）

	男性(n=59)			女性(n=134)		
説明変数	*B*	*SE B*	*β*	*B*	*SE B*	*β*
父親からの被養護体験	.111	.101	.166	-.043	.058	-.069
母親からの被養護体験	-.012	.184	-.012	.095	.081	.114
教師からの被養護体験	.000	.100	-.001	.046	.086	.061
友達からの被養護体験	-.013	.161	-.015	.107	.100	.119
R^2	.026			.047		
自由度調整済みR^2	-.026			.017		

強制投入法

Table 5.　共感的配慮を従属変数としたときの重回帰分析の結果（男女別）

	男性(n=59)			女性(n=134)		
説明変数	*B*	*SE B*	*β*	*B*	*SE B*	*β*
父親からの被養護体験	-.018	.087	-.030	.038	.046	.067
母親からの被養護体験	.067	.159	.076	.126	.065	.167
教師からの被養護体験	.082	.086	.144	.132	.068	.195
友達からの被養護体験	.062	.139	.078	.181	.080	.223 *
R^2	.055			.245 ***		
自由度調整済みR^2	-.015			.222 ***		

*p<.05, ***p<.001

強制投入法

Table 6.　想像性を従属変数としたときの重回帰分析の結果（男女別）

	男性(n=59)			女性(n=134)		
説明変数	*B*	*SE B*	*β*	*B*	*SE B*	*β*
父親からの被養護体験	-.090	.101	-.116	.024	.057	.040
母親からの被養護体験	.405	.184	.347 *	.066	.080	.082
教師からの被養護体験	-.065	.100	-.088	-.025	.085	-.034
友達からの被養護体験	.324	.161	.309 *	.013	.099	.014
R^2	.270 **			.009		
自由度調整済みR^2	.216 **			-.021		

*p<.05, **p<.01

強制投入法

Table 7.　視点取得を従属変数としたときの重回帰分析の結果（男女別）

	男性(n=59)			女性(n=134)		
説明変数	*B*	*SE B*	*β*	*B*	*SE B*	*β*
父親からの被養護体験	-.055	.085	-.099	-.010	.227	-.019
母親からの被養護体験	.053	.154	.063	.227	.062	.320 **
教師からの被養護体験	-.007	.084	-.012	.051	.065	.079
友達からの被養護体験	-.039	.135	-.051	.155	.076	.203 *
R^2	.009			.225 ***		
自由度調整済みR^2	-.064			.201 ***		

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

強制投入法

Table 8.　個人的苦痛を従属変数としたときの重回帰分析の結果（男女別）

説明変数	男性(n=59)			女性(n=134)		
	B	*SE B*	*β*	*B*	*SE B*	*β*
父親からの被養護体験	-.090	.104	.131	.042	.058	.068
母親からの被養護体験	.028	.190	.027	.031	.081	.037
教師からの被養護体験	.070	.104	.106	.050	.086	.067
友達からの被養護体験	-.019	.166	-.021	.003	.101	.003
R^2	.022			.017		
自由度調整済みR^2	-.050			-.014		

強制投入法

Table 9.　多次元共感尺度：ペット飼育経験の有無による男女別の平均値と標準偏差

得点名	男性				t値	女性				t値
	ペット飼育経験					ペット飼育経験				
	あり(n=21)		なし(n=38)			あり(n=62)		なし(n=72)		
	M	*SD*	*M*	*SD*		*M*	*SD*	*M*	*SD*	
被影響性	3.11	(0.68)	3.14	(0.67)	-0.20	3.40	(0.73)	3.42	(0.69)	-0.16
共感的配慮	3.97	(0.66)	3.81	(0.54)	0.98	4.08	(0.72)	4.29	(0.52)	-1.94
想像性	3.70	(0.57)	3.64	(0.87)	0.28	3.87	(0.65)	3.76	(0.71)	0.96
視点取得	3.83	(0.38)	3.67	(0.63)	1.02	3.85	(0.65)	4.02	(0.53)	-1.74
個人的苦痛	3.54	(0.54)	3.49	(0.76)	0.26	3.75	(0.67)	3.60	(0.71)	1.25

られたが（r=.424, p<.01）、教師や友達とはみられなかった。一方で女性の場合は、すべての被養護体験に弱いから中程度の正の相関がみられた（r=.261 ～ .618, すべて p<.01）。

児童期の被養護体験と共感性の相関をみると、男性では「母親からの被養護体験」と「友達からの被養護体験」は、「想像性」と中程度の正の相関が認められた（順に、r=.438, p<.01; r=.449, p<.01）。その他の被養護体験と多次元共感性下位尺度との間には有意な相関は認められなかった。女性では、「父親からの被養護体験」は「共感的配慮」と弱い正の相関（r=.232, p<.01）が認められた。「母親からの被養護体験」は「共感的配慮」と弱い正の相関（r=.335, p<.01）、「視点取得」と中程度の正の相関（r=.409, p<.01）があった。「教師からの被養護体験」は「共感的配慮」と中程度の正の相関（r=.416, p<.01）、「視点取得」と弱い正の相関（r=.324, p<.01）が認められた。「友達からの被養護体験」は「共感的配慮」と中程度の正の相関（r=.415, <.01）、「視点取得」と弱い正の相関（r=.348, p<.01）が認められた。

多次元共感性下位尺度間の相関をみると、男女ともに「共感的配慮」と「視点取得」に弱いから中程度の正の相関（男性 , r=.325, p<.5　女性 , r=.453, p<.01）がみられた。また女性では「想像性」と「個人的苦痛」の間に弱い正の相関がみられた（r=.279, p<.01）。

さらに、どの被養護体験が大学生の共感性に影響を与えているかを調べるために、被養護体験を独立変数、共感性を従属変数にして、男女別に強制投入法による重回帰分析を行った（Table 4 ～ Table 8）。まず、男女ともに変数間の相関が $|r|$>0.8 となる変数は存在せず、またすべての変数で VIF は 2.0 以下であり、多重共線性には問題がなかったのですべての変数を使用した。重回帰分析の結果、男女とともに多次元共感性の「被影響性」と「個人的苦痛」については、いずれも自由度調整済み決定係数は有意ではなかった。

男性においては、「想像性」のみで自由度調整済み決定係数が有意であった（$adjR^2$=.216）（Table 6）。「母親からの被養護体験」と「友達からの被養護体験」では有意な標準偏回帰係数（順に, β = .347, p<.05; β = .309, p<..05）を示した。男性では、「母親からの被養護体験」と「友達からの被養護体験」が高いほど、「想像性」が高いといえる。女性においては、「共感的配慮」と「視点取得」で自由度調整済み決定係数が有意であった（順に , $adjR^2$ =.222; $adjR^2$=.201）。「共感的配慮」では、「友達からの被養護体験」が有意な標準偏回帰係数（β = .223, p<.05）を示した。また、「母親からの被養護体験」と「友達からの被養護体験」が、「視点取得」に有意な標準偏回帰係数（順に, β = .320, p<.01; β = .203, p<.05）を示した。女性では、「母親からの被養護体験」が高いほど、「共感的配慮」が高く、「友達からの被養護体験」が高いほど、「共感的配慮」と「視点取得」が高いといえる。

4．児童期のペットの飼育経験の有無、ペットへの養護体験と多次元共感性の関連

男女別にペットの飼育経験の有無によって、多次元共

感性に違いがあるかどうかを調べるために *t* 検定を行った（Table 9）。その結果、すべてにおいて平均値の差は有意ではなかった。次に、ペット飼育者のみを対象として、男女別にペットへの養護体験得点と多次元共感性との相関を調べた（Table 10）。その結果、男性では「被影響性」で中程度の負の相関（r=-.497, p<.05）、女性では「共感的配慮」で弱い正の相関（r=.279, p<.01）がみられた。このことは、単にペット飼育の有無では違いはみられないが、ペットへの養護体験の質が共感性に関連していることを示している。なお、ペットの種類としてはイヌが39名（男性8名、女性31名）、ネコが4名（男性1名、女性3名）、小型哺乳類が14名（男性2名、女性12名）、その他が24名（男性9名、女性15名）であった。

考　察

本研究では大学生を対象として、児童期の被養護体験が青年期の共感性（被影響性、共感的配慮、想像性、視点取得、個人的苦痛）に与える影響を検討した。まず大学生の「共感性」には男女差がみられ、「共感的配慮」「視点取得」「被影響性」の平均値は男性よりも女性で有意に高かった。一般的に共感性は女性の方が男性より高いとされており（加藤・高木 , 1980; 鈴木・木野 , 2008）、本研究の結果もそれと符合するものである。楜澤・福本・岩立（2009）が指摘するように、性別による共感性の違いの背景には、社会・文化的な影響もあるだろう。より女性の方が他者への共感性を重視する文脈に置かれることが多く、他者指向的な共感的行動を強化されている可能性があるだろう。

本研究では児童期の父親、母親、教師、友達との関係を振り返り、当時それぞれの人から受けた被養護体験を現在どのように認知しているかを指標として、現在の共感性に与える影響を分析した。その結果、「被影響性」や「個人的苦痛」には過去の被養護体験の影響は少なく、一方で「共感的配慮」と「視点取得」については影響がみられた。一方で男性は、比較的過去の被養護体験の影響が少ないものの、女性にはみられなかった「想像性」への被養護体験の影響がみられた。ただし男女ともに、いずれの被養護体験も、その影響の大きさを表す決定係数の値が低いことには注意が必要である。このことは、児童期の被養護体験は青年期の共感性に少なからず影響しているが、本研究で採用した予測変数だけでは共感性を説明するには不十分であることを示している。例えば、児童期以前の養育者との愛着や、中学生や高校生での人間関係、きょうだいとの関係など、他の要因も含めて検討していくことが必要だろう。このことに留意した上で、以下では本研究の結果を考察したい。

児童期の被養護体験と青年期の共感性との関連：まず、重回帰分析の結果「被影響性」「個人的苦痛」においては男女ともに過去の被養護体験との関連はみられなかった（Table 4, 8）。「被影響性（まわりの人の意見や感情の影響を受けやすい傾向）」は、「共感的配慮」や「個人的苦痛」などの経験的な反応傾向に比べれば多分に気質的なもので、他者の心理状態に対する素質的な反応とされている（鈴木・木野 , 2008）。また、愛着スタイルが共感性に及ぼす影響を検討した岡田・大浦・福井（2013）も、「被影響性」は愛着に先行する要因であり、気質的な側面が強く影響を与える要因であると指摘している。そのため、本研究でも「被影響性」については、児童期の他者との関わりの影響を受けにくかったものと思われる。むしろ、「被影響性」は児童期の両親、友達、教師との関係性に影響を与える要因であるとも考えられるだろう。

「個人的苦痛」（例、苦しい立場に追い込まれた人を見ると、それが自分の身に起こったことでなくてよかったと心の中で思う）は、相手の感情を理解するのではなく、自分中心の感情がそのまま再生される過程であり、相手の感情への反応として自分が不快な感情を抱く傾向を表すとされている（鈴木・木野・出口ら , 2000）。登張（2003）の研究でも、向社会的行動と「個人的苦痛」とには相関がないことが示されている。本研究の相関分析の結果（Table 3）においても、個人的苦痛は「共感的配慮」と負の相関がみられた。「共感的配慮」は、他者に対して温かい感情を持ったり配慮したりする他者指向的傾向を表すとされている（鈴木・木野・出口ら , 2000）。このことを踏まえると、自己指向的な「個人的苦痛」は、「他者が自分の立場に立ってくれた」「私が不安なとき、力になってくれた」等の被養護体験とは関連がみられなかったのではないかと考えられる。

重回帰分析の結果、児童期の被養護体験が大学生の「共感的配慮」と「視点取得」および「想像性」に影響することが示された（Table 5, 6, 7）。まず、女性においては、児童期の「友達からの被養護体験」が、「共感的

Table 10.　ペットへの養護体験と多次元共感性下位尺度の相関係数

	ペットへの養護体験	
	男性(n=21)	女性(n=62)
被影響性	-.497 **	-.021
共感的配慮	-.270	.279 *
想像性	-.176	-.026
視点取得	-.255	.225
個人的苦痛	.000	.059

*p<.05, **p<.01

配慮」に影響していることが示された（Table 5）。登張（2003）によると、「共感的配慮（共感的関心）」には「他者の苦痛を軽減したい、不幸な他者に対して何かしてあげたい」という内容が含まれている。また、鈴木（2004）が大学生を対象に行った研究では、現在の友人関係満足感と友人関係における快感情経験が、共感的な情緒反応と正の相関関係を持つことが示されている。つまり、過去、現在に関わらず、友人関係を良いものであると認知している人の方が、他者と積極的に関わろうとするため、多次元共感性の中でも他者指向的反応に弁別される「共感的配慮」が高くなったのではないかと考えられる。重回帰分析の結果では、友達以外の父親、母親、教師からの被養護体験は「共感的配慮」との有意な関連はみられなかった。ただし、被養護体験の高低ごとに多次元共感性下位尺度の平均値の差を比較した結果（Table 2）や被養護体験と多次元共感性の相関を検討した結果（Table 3）によると、女性において「共感的配慮」はすべての被養護体験と関連していることが示された。このことを踏まえて考えると、友達との関係性だけでなく、両親や教師との関係性も「共感的配慮」と関連をしており（そもそも女性では父親、母親、教師、友達、すべての被養護体験が相関していた）、いつ、誰と、どのような関係性を築くことが共感性の発達にどのように影響をするのかについて、さらなる検討が必要である。

次に、女性は「母親からの被養護体験」と「友達からの被養護体験」が「視点取得」に影響を与えていることが示された（Table 7）。「視点取得」は、相手の立場に立って気持ちを想像することであり、多次元共感性の中では他者指向的な認知過程であるため、他者とのかかわりの中で育まれる側面が強いのではないかと考えられる。過去に母親や友達が自分の立場に立って考えてくれたことや、自分の味方になってくれたという体験は他者の視点を理解する手助けとなるだろう。そして過去の母親や友達からの被養護体験をもとに、自分自身も他者に同じように行動しようとするため、「視点取得」が高くなるのではないかと考えられる。母親と友達以外の、父親と教師からの被養護体験に関しては、「視点取得」と有意な関連はみられなかった。ただし、被養護体験の高低ごとに多次元共感性下位尺度の平均値の差を比較した結果（Table 2）や被養護体験と多次元共感性の相関を検討した結果（Table 3）によると、女性において「視点取得」は母親、友達に加えて教師からの被養護体験とも弱いながら関連していることが示され、「視点取得」の発達に及ぼす教師の影響も完全には無視できない。楜澤・福本・岩立（2009）の研究でも、女性においてのみ「教師からの被養護体験」が「共感性」に影響していることが示されている。この点については、今後さらに検討が必要である。

「共感的配慮」と「視点取得」では、男性においては児童期の被養護体験の影響がみられなかった（Table 5, 7）。楜澤（2009）、楜澤・福本・岩立（2009）の研究でも、男性は過去の被養護体験が養護性形成にあまり影響しないことが示されている。この結果を含めて、男性の「共感的配慮」や「視点取得」を発達させる他の要因を追求する必要があるだろう。では、女性の方が男性よりも被養護体験の影響を受けるという点についてはどのように考えることができるだろうか。被養護・養護体験の性差の検討を行った楜澤（2011）は、女性の方が男性よりも家族との関係性を重視していると指摘する。和田（1993）の研究では、女性の方が男性よりも友達に対して自己開示や相互依存を望んでいることが示されている。石本・久川・齋藤ら（2009）によると、一般的に女性の方が男性よりも友人関係からの影響を受けやすく悩みも大きくなりやすいという。先行研究の結果を踏まえると、女性は家族との関係性に加えて、友達などの重要な他者との関係性も重視する傾向にあると考えられ、本研究の結果でも母親だけでなく友達からの被養護体験が「共感的配慮」や「視点取得」といった他者指向的な反応に影響を与えていることを示唆している。

重回帰分析の結果、男性は児童期の「母親からの被養護体験」と「友達からの被養護体験」が「想像性」に影響を与えていた（Table 6）。親の養育態度や愛着スタイルと青年期の「想像性」との関係はこれまで示されていなかったが、本研究の結果は、過去の母親や友達からの被養護体験が男子大学生の「想像性」に影響していることを示す結果となった。小学5年生を対象に、児童期における友人との経験が共感性に及ぼす影響を調べた亀山・細川（2020）によると、男子において「自分たちだけの世界を持とうとする」経験が「ファンタジー（想像性）」に影響を与えているという。ここでの「自分たちだけの世界を持とうとする」経験とは、友達・仲間との遊び場面のことを指している。本研究において、児童期における「友達からの被養護体験」が高いと回答した大学生は、友達と遊んだり、会話したりした経験も豊富にあるのではないかと推測される。このことから、児童期の友達との関わりが豊かであることは、男子大学生の「想像性」に少なからず影響を与えている可能性があるだろう。

児童期のペット飼育と養護体験が共感性に及ぼす影響：最後に、「児童期のペットへの養護体験」と共感性の関係について述べる。児童期のペット飼育の有無で比較した結果、飼育群と非飼育群では多次元共感性のいずれの尺度にも平均値の差はなかった。一方で、ペットへの養護体験の得点（「私はペットをかわいいと思っていた」「私はペットを好きだった」「私はよくペットの世話をした」の合計得点）と多次元共感性尺度にはいくつかの相関がみられた（Table 10）。まず、女性では「ペットへの養護体験」と「共感的配慮」とに弱い相関があった。小学生、中学生、高校生を対象に、動物飼育経験と動物に対する好意度が共感性に及ぼす影響を検討した塗師（2000）の研究によると、動物の飼育経験の有無だけでなく、現在及び過去に家庭でペットをかわいがって飼育している、もしくは飼育していたということが、共感性に影響を与えることが示されている。本研究の結果も、

家族と同様に大切な存在であるペットをかわいがっていた、よく世話をしたという経験が、共感性の発達に関連していることを示唆している。男性では、「ペットへの養護体験」と「被影響性（まわりの人の意見や感情の影響を受けやすい傾向）」に中程度の負の相関がみられた。ペットというより弱い対象への養護的な関わりを通して自信を得、他人に影響され流されることなく自分の意思を決めることができるようになるのかもしれない。ただし、先述したように「被影響性」は気質的な要素が強い（鈴木・木野 , 2008）。また、本研究の分析の対象となった男性で、児童期に動物の飼育経験のあったのが 21 名と少数であることからも、この結果を一般化するのは難しいと考えられる。男性における児童期のペットへの養護体験と共感性の関連は今後さらに検討が必要である。

母親、父親、教師、友達からの被養護体験が共感性に及ぼす影響の違いについて：本研究では児童期の父親、母親、教師、友達からの被養護体験が現在の共感性（被影響性、共感的配慮、想像性、視点取得、個人的苦痛）に与える影響を男女別に検討した。その結果、まず養育者との関係性に着目すると、児童期の母親との関係性が特に青年の共感性に関連していることが示された。これは、先行研究とも一致する結果であり（辻道ら , 2017; 本多・櫻井 , 2010; 楜澤・福本・岩立 , 2009）、過去、現在に関わらず母親との関係性は共感性の発達において重要であると考えられる。一方、父親との関係性が共感性に与える影響は相対的に少なかった。楜澤・福本・岩立（2009）の研究でも過去の父親からの被養護体験は共感性と関連がみられなかった。日本では、父親は一家の経済の稼ぎ手であり、母親は家事と育児の責任者・実行者という性役割分業が、最も典型的に保持されていた（柏木, 1993）。また、長谷川（2005）によると、日本では、一昔前まで家庭での「強い父親」の存在がごく当たり前のことであったが、社会の変化に伴い「父親不在」といった父親の存在の希薄化が指摘されており、父親の家族に対する影響力が弱くなっているという。現在、日本では共働き世帯の増加など家族形態は多様化してきているものの、このような過去における父親の役割や父親の存在の希薄化が、父親との関係性が共感性に与える影響の少なさに関連しているのではないかと考えられる。

教師からの被養護体験についても、本研究の結果からはその影響を否定はできないが、決して大きいものではなかった。楜澤・福本・岩立（2009）の研究では、女性、それも姉の立場の人に限定すると、教師からの被養護体験は大学生の共感性に影響を及ぼしていた。本研究では、きょうだいの有無などによる詳細な検討はしていない。家族関係やきょうだい構成も含めた検討が今後必要だと思われる。また、本研究の質問は教師一般について尋ねたので、回答者は小学校時代に関わった複数の教師を思い浮かべながら答えたものと思われる。今後、例えば児童期に最も関係が深かった特定の教師を想像して回答することで結果は変わってくる可能性がある。児童期における教師との関わりが子どもの共感性の発達に及ぼす影響については、より詳細に検討する必要がるだろう。

本研究で児童期の友達からの被養護体験が、共感性に関連していることが示されたことは、注目すべき点であろう。また仲間関係は、女性では「共感的配慮」や「視点取得」に、男性では「想像性」に影響を及ぼすという違いがあることも興味深い。ギャングエイジとよばれる児童期中期から後期になると、子どもたちは遊びを中心としたさまざまな活動を集団で行うようになり、この時期に現れる凝集性の高い仲間集団をギャング集団とよぶ（田瓜 , 2004）。その中で、子どもたちは集団の中での地位や役割を遂行することを通して、社会的知識や技能を獲得する機会を得ることから、ギャング集団は児童の社会性の発達において重要な意味を持っていると指摘されている。このことから、児童期は仲間集団の発達において重要な時期であるため、その頃の友達との関わりが社会性の一部である共感性の発達に関連しているのではないかと考えられる。しかし、仲間関係の発達は児童期のみならず、その後も続いていく。児童期から青年期にかけての仲間関係は、社会的スキルの発達や自我形成にとって重要な時期であると考えられている（網谷 , 2019）。そのため、児童期から青年期にかけての友達との関係性の変化や、仲間集団の発達的変化が青年期の共感性にどのような影響を及ぼすかは今後さらに検討が必要である。

今後の展望：本研究では、児童期の被養護体験をどのように認識しているのかが大学生の現在の共感性にどのように影響しているのかを検討した。しかし、児童期の被養護体験のみが共感性に影響しているということには限界があるといえる。今後の課題として、児童期から青年期の他者との関係性の変化と児童期から青年期の共感性の発達的変化を検討していくことが必要であろう。長子か末子かなどのきょうだい間の関係性なども本研究では扱っていない。さらに、本研究では男性の人数が少なかった。共感性や共感性に与える影響過程の男女差を明らかにするためには、今後はより多くの男性のデータを分析することが必要であると考えられる。

謝　辞

本論文を作成するにあたり、調査にご協力いただいた皆様に、心より感謝申し上げます。

引用文献

網谷綾香 . (2019). 子どもから大人への変化を生きぬくために必要な糧とは？：児童期から青年期の発達と学校 . 藤崎亜由子・羽野ゆつ子・渋谷郁子・網谷綾香（編著）. あなたと生きる発達心理学 , (pp.61-72). ナカニシヤ出版

長谷川啓三 . (2005). ソリューション・バンク：ブリーフセラピーの哲学と新展開 . 金子書房.

本多潤子・櫻井登世子 . (2010). 青年期の過去及び現在の

親との関係の認識と共感性の関連 . 日本教育心理学会総会発表論文集，52(0)，247.
石本悠真・久川真帆・齊藤誠一・上長 然・則定百合子・日潟潤子・森口龍平 . (2009). 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連 . 発達心理学研究，20(2)，125–133.
岩下豊彦・春木 豊 . (1975). 共感の心理学：人間関係の基礎 . 川島書店.
亀山優佳・細川美由紀 . (2020). 児童期における友人との経験が共感性に及ぼす影響 . 茨城大学教育学部紀要 (教育科学)，69，261–274.
柏木惠子 (編). (1993). 父親の発達心理学：父親の現在とその周辺 . 川島書店
加藤隆勝・高木秀明 . (1980). 青年期における情動共感性の特質 . 筑波大学心理学研究 , 2, 33-42.
菊池章夫 . (1988). 思いやりを科学する：向社会的行動の心理とスキル . 川島書店
小嶋秀夫 . (1989). 養護性の発達とその意味 . 小嶋秀夫 (編). 乳幼児の社会的世界 (pp.187–204). 有斐閣.
今野仁博・小川俊樹 . (2012). 認知的共感性と成人愛着の関連について：愛着回避に着目して . 筑波大学心理学研究，43，97–107.
梱澤令子 . (2009). 1985 年から現在までの我が国の養護性 nurturance の研究動向 . 日本女子大学大学院人間社会研究科紀要，15，201–211.
梱澤令子 . (2011). 被養護・養護体験尺度の作成および体験の性差の検討 . 日本女子大学大学院人間社会研究科紀要，17，65–72.
梱澤令子・福本 俊・岩立志津夫 . (2009). 大学生における現在の被養護・養護体験が現在の養護性 (nurturance) へ及ぼす影響 . 教育心理学研究，57，168–179.
宮腰裕子 . (2005). 愛着スタイルと大学生の心理特性との関連：内的作業モデルが共感性や自己開示に与える影響について . 武庫川女子大学発達臨床心理学研究所紀要，7，207–213.
塗師 斌 . (2000). 動物飼育経験と動物への好意度が共感性に及ぼす影響 . 横浜国立大学教育人間科学部紀要（教育科学），3，1–10,
岡田麻侑・大浦真一・福井義一 . (2016). 虐待的養育環境と愛着スタイルが感情調節と共感性に及ぼす影響の再検討 (2)：共感性を従属変数として . 日本教育心理学会総会発表論文集，55，472.
大浦真一・福井義一 . (2016). 愛着の顕在・潜在的内的作業モデルが共感性に及ぼす影響：潜在連合テストを用いた検討 . 感情心理学研究（Supplement 号），23，35.
澤田瑞也 . (1995). 人間関係の生涯発達 . 培風館.
角田 豊 . (1994). 共感経験尺度改訂版 (EESR) の作成と共感の類型化の試み . 教育心理学研究，42，193–200.
鈴木有美・木野和代・出口智子・遠山孝司・出口拓彦・伊田勝憲…野田勝子 (2000). 多次元共感性尺度作成の試み　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要．心理発達科学，47，269–279.
鈴木有美・木野和代 . (2008). 多次元共感性尺度（MES）の作成：自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて . 教育心理学研究，56，487–497.
鈴木隆子 . (1992). 向社会的行動に影響する諸要因：共感性・社会的スキル・外向性 . 実験社会心理学研究，32(1)，71–84.
鈴木有美 . (2004). 現代青年の友人関係における主観的ウェルビーイング．名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学，51，207–215.
田瓜宏二 . (2004). 子ども同士で遊ぶ . 無藤隆・岡本祐子・大坪治彦 (編者) . やわらかアカデミズム・＜わかる＞シリーズ , よくわかる発達心理学 (pp.50-51). ミネルヴァ書房 .
辻道英里奈・植田瑞穂・桂田恵美子 . (2017). 大学生の向社会的行動および共感性と親子関係との関連 . 関西学院心理科学研究，43，49–54.
登張真稲 . (2000). 多次元的視点に基づく共感性研究の展望 . 性格心理学研究，9，36–51.
登張真稲 . (2003). 青年期の共感性の発達：多次元的視点による検討 . 発達心理学研究，14，136–148.
和田 実 . (1993). 同性友人関係：その性および性役割タイプによる差異 . 社会心理学研究，8(2)，67–75.